

アクティブラーニングの導入に向けて、初等中等教育の

全教育課程に活かす協同学習の豊かさを考える

～教科教育と生徒指導の一体化と一貫性～

渡辺 正雄（福島県スクールカウンセラー）

キーワード：協同学習・準備教育・一体化・一貫性・生きる力

新学習指導要領で導入されようとしているアクティブラーニングは、現・前学習指導要領を踏まえた必然的な帰結であり、明確な文言化である。旧学習指導要領の重点課題や総合的な学習には、「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質を育てる」というアクティブラーニングの根幹が示されており、具体的に「体験学習や問題解決的な学習、グループ学習、教室での画一的・知識伝達的な授業からの転換」も記載されている。更に、現学習指導要領では、旧学習指導要領の趣旨を引き継いだ上で、「習得した知識の活用」「思考力・判断力・表現力の育成」「全教科における言語活動の重視」が示され、話す（聴く）・書く（読む）・発表する・話し合う等の子どもたちの学習への主体的関与を通じた習得知識の活用にも言及している。新学習指導要領で文言化されるアクティブラーニングの諮問では、「何を学ぶか」と共に「いかに学ぶか」が重視され、学習者の主体的能動的姿勢と共に学習の協同性の提示に特徴がある。これはアクティブラーニング導入における協同学習の勧めである。

アクティブラーニングは、授業場面での話す（聴く）・書く（読む）・話し合う・発表する等のコミュニケーションを必然とするが、その学びの豊かさは協同性の深まりと比例する。課題に対して、まず自らが自己内の対話を通じて思考し、ペア・グループ・一斉の協同学習を果たす。一人で学ぶよりも二人、二人よりもグループ、グループよりも一斉と学びの練り合いを高める協同性が肝要となる。しかし、発達段階が下がるほど、学び合いや話し合いのレディネスが低く、協同学習を通じてアクティブラーニングを深めるためには発達段階に応じた準備教育が必要である。一つは学び合いの意義の提示である。学習一般が競争学習・個人学習として常態化されている現状に対して、一人より仲間と学ぶことの有効性、協同性の喜びや互惠性の豊かさを教え、学習に対する個人と仲間への責任を示していくことである。今ひとつは、殊に話す（聴く）・話し合うためのスキルや留意点の教示である。協同学習を通じて必然となる公共圏のコミュニケーションの仕方の提示と訓練である。話すにも聴くにも、客観性や論理性の発信と受信の仕方がある。限られた時間のやりとりの中で、話し手の場合の結論と論拠のワンセンテンストーク、聴き手の場合の主張

のキーワードや論拠のまとめ方等である。同時に、互いに話す・聴くときの視線や表情や姿勢、話すときの語調や声量等のコミュニケーションに伴う態度の留意が肝要である。言語と非言語のコミュニケーションは、学習課題の習得の機会であると共に自ら関わり合いの場となり、丁寧な話し合いは人間関係の醸成に資する。対話による肯定的相互関係の形成は、子どもたちに所属感や居場所感を与え、そこに教科教育と生徒指導の一体化が生起する。一方、課題に対する話し合いの仕方の提示も大切である。ベスト解・唯一解・複数解を求めるために、k j法を使った整理法、トレードオフを利用した選択決定の仕方、弁証法的な合意形成法などを平易に教示する必要がある。

協同学習を中核とした教科教育におけるアクティブラーニングは、生徒指導・特別活動（HR・道徳・生徒会・クラブ・行事）という教育活動の一方の軸にも実施されるべきである。学習と生活の場という全教育課程で一貫性を持って実施されて、協同学習を中核としたアクティブラーニングは更に効果的となる。学校生活を送ること自体が協同学習・協同教育の機会となり、個人主義社会でもなく全体主義的社会でもない、相互が尊重される共生社会が体験される。喧伝される「生きる力」とは、「自らを生きる力」であり、当時に「共に生きる力」である。それは、特別支援教育の合理的配慮やユニバーサルデザインにもつながるものである。提示キーワードを接続化して、議論を交わす機会を得たい。

支え合う人間関係を基盤にした学力向上と不登校の減少を

目指した取組み

原 範幸（岡山県高梁中学校教諭・浅口市立寄島中学校 前校長）

私は平成 25 年から 3 年間、協同学習、SEL（社会性と情動の学習）、ピア・サポート、品格教育、コミュニケーショントレーニングを小規模な中学校（生徒数 117 名 平成 8 月現在）に順次導入した。学力向上と不登校数の減少が課題であったため、効果が確かめられているこのプログラムを提案して取り組んだ結果、平成 27 年の 4 月には、学力は全校平均（教研式標準学力検査）にまで回復し、不登校の出現率は平成 25 年 4 月の 5.3%から全国平均の 2.6%に減少した。取組を効果的に導入するために、教員研修を充実させ、学校経営計画書にプログラムを書き込み、学校関係者評価委員会などで生徒の成長が評価されるようにした。学習面の協同学習と、生徒指導、特別活動のピア・サポートやコミュニケーショントレーニングを並行して行ったことにより、相乗効果が生じて、比較的短時間で成果が出たのではないかと考えている。

看護教育における協同学習の活用方法について考える

—実際の授業案・運営を使って—

司会・話題提供：鮫島 輝美（京都光華女子大学）

話題提供：那須 さとみ（梅花女子大学）

キーワード：看護教育、講義-演習-実習、協同学習の活用方法、授業案

現在、看護教育において、基礎教育の改善は大きな社会的課題となっている。「看護学教育の在り方に関する検討会(2002)」の報告書によれば、看護を取り巻く社会状況の変化とともに、教育に対する期待も変化しており、目指すべき看護人材の目標に「援助的人間関係形成能力」「専門知識に基づいた判断力の育成」「対象者の自立と自己表現を支えるための創造力の育成」など、高い実践能力の養成が求められている。同時に看護基礎教育を充実させるためには、看護教員の質の向上が不可欠であり、質の高い教育を実施する事の出来る看護教員に求められている資質や能力の課題も明確になっている(厚生労働省, 2010)。

しかし、これまでも看護教員が、資質や能力の向上に努めていない訳ではない。基本的に看護教員は、女性の割合が高く、真面目で誠実な文化があり、自分が担当した科目の授業展開の改善に、日々努力している。また、学生の学習意欲・主体的な学習行動・看護職への思考をどのように引き出して、高める事が出来るのかを模索し、確かな知識や技術の習得を図るための教育方法について、頭を悩ませているといえる(緒方, 2013)。また、厚生労働省(2011)は、「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書」において、看護師に求められる実践能力を育てるための教育方法として、講義・演習・実習を効果的に組み合わせ、それらの効果的な指導の方法を検討し、専門教育における学習の動機づけを行い、体験の機会を増やし、振り返りをする事を推奨している。

こういった現状に対して、「自分自身と他の学友たちの学びを最大にするために、小グループを使って一緒に勉強させる学習指導法(ジェイコブズ・パワー・ワンイン, 2007)」である協同学習は、様々な解決策を与えてくれる教育方法である。現在、多くの看護教員が注目しており、その手応えを私たちも感じている。

企画者は、2014年から大阪にて開催されている「協同学習を用いた看護教育研究会(以下、看護教育研究会)」に参加し、協同学習に取り組んできた。理解が進み、実践を重ねるに従い、学びを深めると同時に、様々な疑問も生じた。解決の方法は、自分で気づくよりも、看護教育研究会において、協同学習法を用いて、他の教員の授業案や授業展開事例を

学ぶ事で、多くのヒントをもらい、次の実践へのモチベーションを上げる機会となった。

そこで今回、いつもの「看護教育研究会」を飛び出し、より多くの方々と、授業案や授業運営の実際から、学び合いの機会を持ちたいと、この企画を考えるにいたった。また今回は、学内の講義だけでなく、学内演習の授業案も準備する予定である。そのため、看護学の教員だけでなく、実践知を育成するために「講義」—「演習」—「実習」という学習形態を採用している「対人援助職」の方々にも、多くの学びを用意できると自負している。

本ラウンドテーブルでは、学習におけるメタ理論に「実践的アプローチ(香川, 2011)」を採用し、学習におけるパラダイムシフトを前提としている。認知主義的学習転移論では、具体的状況に縛られた状態から脱状態的な状態へ、つまり「具体から抽象へ」次第に上昇していく過程を発達と見なしている。しかし、実践家の発達モデルは逆であり、「抽象的な形式知を特定の状況に根付かせて具体化させていく過程」と考える。実践知は、決して、形式知の上にただ積み上げられて育つものではなく、既存の形式知への批判、もとの形式知にはなかった、自らの状況経験に基づく、独自の新たな知識や振る舞いの創造からなる「抽象から具体への拡張」を伴う発達と捉えている。

多くの参加者を期待している。

ジェイコブズ, ジョージ・パワー, マイケル・イン, ワン, ロー(2007). 関田一彦(監訳) 伏野久美子・木村春美(訳)(2007). 先生のためのアイディアブック—協同学習の基本原則とテクニック, 日本協同教育学会

香川秀太(2011). 実践知と形式知, 単一状況と複雑状況, 分析と介入, そして質と量の越境の対話—状況論・活動理論における看護研究に着目して, 質的心理学フォーラム, 3, 62-72.

看護学教育の在り方に関する検討会(2002). 大学における看護実践能力の育成の充実に向けて, 2002年3月26日

(<http://www.umin.ac.jp/kango/kyouiku/report.pdf>) (2012年3月12日)

厚生労働省(2010). 今後の看護教員のあり方に関する検討会報告書, 2010年2月17日

(<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/02/s0217-7.html>) (2012年3月12日)

厚生労働省(2011). 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書, 2011年2月28日

(<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001vb6s-att/2r9852000001vbiu.pdf>) (2012年3月12日)

緒方巧(2013). 教育方法のパラダイム転換としての協同学習, 看護教育, 54(4), pp.320-326.

中学校における協同学習導入の成果と課題

山本成之・小宮康子（津市立朝陽中学校）

松田真・渡辺祥啓（鈴鹿市立鼓ヶ浦中学校）

笹屋孝允（三重大学教育学部／企画・司会）

キーワード：中学校、グループ学習、校内研修、学びの共同体

1. 企画趣旨

- ・協同学習を導入している学校の実践に触れ、その成果と課題について検討する
- ・協同学習とその導入方法の今後の展望、ビジョンを構築する

2. 津市立朝陽中学校の概要と取り組み

【学校概要】

平成18年1月に河芸町立朝陽中学校から津市立朝陽中学校となる。4小学校ある校区は大規模な住宅造成が進んでおり、生徒数は増加傾向にある。現在、631人 21学級（特別支援学級3学級含む）となっている。生徒は素直で温和であり、学校行事（体育祭、文化祭など）・ボランティア活動・部活動などに熱心に取り組む。

【授業についての基本的な考え方】

『学びの共同体』の理念に基づき、学校で「子どもを1人もひとりぼっちにしない」という考えを基本にして授業・学校づくりに取り組んでいる。教師が講義をする一斉型の授業ではなく、ペア学習や4人グループで学び合う授業を行うため、教師は教科の本質に沿った課題を設定する。「この授業で何を学ばせたいのか」を明確にして教材研究を行う。

【生徒の反応】

入学時は落ち着きが無く生徒間トラブルも起きるが、徐々に他者と関わるようになる。授業では学びのルールにそって学び合い、「わからない」と言える雰囲気がある。また、聴くことを大切に、安心して過ごせている。表情が穏やかになり、柔らかい雰囲気が教室に漂う。卒業後、高校での授業が学び合いの形でないため、困惑している現状もある。

【校内研修】

平成24年度から、授業づくりを中心に据えた校内研修を行っている。近隣実践校の公開授業研究会・県外セミナーへ参加するなどして、学び合う授業について教師が学び始めた。しかし、教職員全員の意識が揃わない状況にあり、学校づくりに至らなかった。

26年度に学校長が替わり、研修主題と学校教育目標を「仲間とともに学び合い、主体的に生きる生徒の育成」と設定し、2学期より学校全体で学びの共同体の理念に沿った授業・学校づくりを再スタートした。27年度から、入学式翌日に各学年集会で「仲間とともに学び合う」ことについて話し、また、4月に転入教員対象に授業を提案し研修を行った。現在も年4回の公開研究会・先進校視察・互いの授業を見合うことを続けている。

【今後の課題】

学校規模が大きく、教員数が45人を超えている。毎年の人事異動によって、多数の教員が入れ替わることになる。教員が替わっても、子どもの学びが変わらないように、子どもの学びが損なわれないように、継続する事が課題であると感じている。

3. 鈴鹿市立鼓ヶ浦中学校の概要と取り組み

【学校概要】

生徒数452人、16学級（特別支援1学級）の中規模校である。海が見えるほど校舎が海岸に近く、津波防災活動にも力を入れている。「来てよかった、明日も来たい学校」を目指し、教職員は生徒が安心して学校に来られるよう努めている。校区3小学校から入学する生徒は新しい共同体を形成し、仲間同士のつながりを大切に、行事や部活、授業を頑張る。

【授業についての基本的な考え方】

5年前から「学び続ける子は崩れない」という理念のもと、「一人ひとりの学びを保障する授業づくり」に取り組み、「聴き合う関係」「ジャンプのある学び」「教科の本質に即した学び」を追求している。コの字型座席配置や小グループによる活動を取り入れ、また、仲間と一緒に解決できるレベルの高い「ジャンプ課題」を仲間と解き、思考を深めることを目指している。その中でお互いが「わからない」と言える温かい共同体を作る。

【生徒の反応】

最初は座席配置やグループ学習に違和感を持ったり、面倒くさがったりした。しかし、授業の課題を練ることで、自然とグループで考えたいという気持ちが高まり、行事や部活動でも自然とグループを作り、「わからない」と言える関係性ができた。生徒が受け身にならず、自分から学び取ろうとする雰囲気が感じられる。今年度の学力調査では長年課題であった自己肯定感の低さを少し解消することができ、取り組みの成果が見られた。

【校内研修】

①全員の授業公開②質の高い学びを目指した教科・学年協同での授業案検討③先進校の校外視察、の3点を推進している。研究授業の研修は公開研を含めて年7回行っている。いずれもアドバイザーを招聘し、次につながる助言を頂いている。また、研究授業の前には教科部会を必ず開き、質の高い学びを保障するため何度も授業デザインを検討している。

【今後の課題】

例年教師の異動が多く、年度始めに学びの共同体の理念の確認から入るが、実践してみないと取り組みの良さや疑問点は感じられず、探り探りのスタートとなってしまう。その中で、コの字型だが講義中心の授業になるなど、形だけの取り組みになってしまうこともあった。また、教職員の年齢が若くなり、基本的な研修を行う必要もある。

4. ラウンドテーブルの進め方

- ・朝陽中学校、鼓ヶ浦中学校の概要、協同学習導入の実践について発表いただく。
- ・グループセッションにて、協同学習導入の成果と課題について再考する。
- ・協同学習とその導入方法の今後の展望を考察する。